

埋蔵文化財報告書 第5集

ろく たん だ
六 反 田 遺 跡

1 9 8 5

菊川町教育委員会

例　　言

1. 本書は、1984年8月9日より、1984年12月1日まで実施された、静岡県小笠郡菊川町反田825番地に所在する、六反田遺跡の発掘調査報告である。
2. 本調査は、中部電力株式会社、浜岡幹線No56鉄塔工事敷地に該当するため、中部電力株式会社より、菊川町教育委員会が委託を受けて実施したものである。
3. 本調査は、菊川町文化財審議委員長、鈴木則夫氏が担当し、調査員として山口三夫、栗田有城、調査補助員として、栗田真澄、浅井さかえの協力を得た。また、出土品の整理作業には、鈴木順子、河城地区センター内、社会教育指導員高木俊雄の協力を得た。
4. 実測図・写真の整理・図版の作成は山口があたり、遺構の実測・遺物の洗浄・整理・実測には、浅井さかえ、鈴木順子の両名の協力を得た。
5. 本書の執筆は、山口三夫が担当し、鈴木則夫が監修した。
6. 本書の編集は、鈴木則夫、山口三夫が行った。
7. 本調査及び本書刊行に関する事務は、菊川町教育委員会があたった。

目 次

第1章 調査の至る経過と方法.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査の方法と経過.....	1
第2章 遺跡の環境と層序.....	4
第3章 遺構の概要.....	4
第4章 遺物.....	6
まとめ.....	7
資料.....	8
おわりに.....	8

挿図図版

挿図第1 遺跡周辺の地形図.....	3
挿図第2 全体図.....	10
挿図第3 土層図.....	11
挿図第4 窯跡実測図.....	12
挿図第5 集石溝実測図.....	13
挿図第6 遺物実測図1.....	14
挿図第7 遺物実測図2.....	15
挿図第8 遺物実測図3.....	16

挿表

挿表第1 遺物観察表.....	9
-----------------	---

写真図版

第1図版 A 遺跡遠景（南側から）	第4図版 A E10石組完掘
B 遺跡発掘前全景	B D10—3須恵器出土状態
C 完掘状況（南側から）	C E10グリット
第2図版 A C10グリット集石溝と窯	第5図版 遺物 1
B C10—2グリット集石溝	第6図版 遺物 2
C C10—1グリット石組	第7図版 遺物 3
第3図版 A 窯口部	
B 窯内部	
C 窯煙道部	

第1章 調査の至る経過と方法

1. 調査に至る経過

中部電力綿浜岡発電所の送電用の鉄塔建設に伴う打ち合せを行った結果、建設予定地内に六反田遺跡が含まれているというので確認調査をすることになった。(昭和59年3月14日)

それに先立って、茶園の所有者の了解を得なければならないので中部電力の担当者に依頼して翌3月15日、地主立ち合いのもと現地に於てトレーンチ南北1本(巾1.6m、長さ13.4m)グリット東西4ヶ所(2m四方トレーンチを中心にして西へ4m間隔、2ヶ所東へ7mの間隔2ヶ所)を設定することに決定した。

以上のことから4月3日～6日にかけて確認の作業に入り、平安末～戦国時代(室町・安土・桃山)にかけての遺跡の様子である。発掘調査をするには、縄文時代を想定しながら調査することが必要であろうと思われる。

調査開始は7月上旬頃より作業に向けて、中部電力との話し合いを進めていくことになった。

2. 調査の方法と経過

1984年4月3日、4日の両日にわたる水島氏の試掘調査により、須恵器小皿片、黒曜石片、土師器片、灰釉陶器片、天目茶碗片等の検出があった。

8月9日、中部電力株式会社職員によりNo.56鉄塔脚部地点の明示を求め、同日午後から茶樹の伐採を開始した。

茶樹伐採後、調査予定地内に任意のポイントを設け基準とし、段丘稜線に合わせて南北線を設定し10m方眼のグリットを設定した。

グリットには、西から東へB・C・D・Eのアルファベットを付し、北から南へ8・9・10・11のアラビア数字をふた。更に1グリット内を5m方眼に区画し、東半分を北より南へ1・2・西半分を同じく3・4と地点名を付した。

盆休み、日曜日を含み、茶樹伐採及び片付けの終了は、8月17日までの日数を要した。片付け後、表面清掃を行うと同時に、上記グリットを設定しグリット名は東北隅の杭に標記した。

自然面において、調査区南部の水田への湧水箇所に最も近いと思われるD区に、D8グリットよりD11グリットにむけて巾2mのトレーンチを設定しDトレーンチとした。

また、東西には、B10-2よりE10-2にむけて巾2mのトレーンチを設定し、B-Eトレーンチとした。

茶樹根の掘り上げと表土はぎはDトレーンチから開始し、8月23日・Dトレーンチの表土はぎを完了し同日からB-EトレーンチのBグリットよりDグリットへの表土はぎを行った。

Dトレーンチ表土内からは陶器片4片を探集したが、いずれも近代のものであった。

D10-2及びD10-1にかけては、表土下に明黄色の岩塊を含む黄褐色土が現れ、更にD10-1北部においては表土との攪乱の様相が著しかった。

この附近は傾斜も急となり、茶畠似前か或いは開墾時に於ける土の移動の激しかったものと推定された。

D 9-2 から D 9-1 にかけても一部炭を含む灰石粘土が検出され、更に表土と岩塊を含む暗褐色土との搅乱が続いた。

D 8-2 に於いては、搅乱土、灰色山粘土、暗色土と、わずか 4m の間にめまぐるしく変化し土の移動の激しさが推定された。

B-E トレンチは表土はぎに加えて、B グリットから E グリットにかけて一挙に 0.5m 堀り下げを行った。盆休みによる作業の遅れと、三番茶終了後的小農閑期により作業員の数人の多かったことにによる。

西側 B10-2 グリットにより開始したが、作上は 0.2m~0.25m と浅く最初から約 3m の間に於て、黄色土を多量に含む暗灰色土、黄色土、黄色土と岩を含む暗灰色土と変化し、ここでも土の移動の激しかったことが推察された。

更に C10-4 グリットにかかると、暗灰色土は 0.1m 以下と薄くなり、礫を多量に含む暗褐色土が現れた。この礫を含む層も約 4m で消失し、灰色粘土層が現れた。

C10-2 地点よりは暗灰色土の含有物が今までの黄土、岩から炭化物に変化し始め、更に暗褐色土が上部に現れ始めた。

D10-4 地点に入ると、4 月の水島氏による試掘溝に表土において約 0.5m 離れて茶園暗渠排水溝が現れ、この並行する 2 本の溝により約 2m が搅乱されていた。

暗渠排水溝のはずれからは、再び暗灰色土内の含有物は岩、赤土と変わり、D10-2 地点に入ると更にその上部に赤褐色土、黒土の混合土が現れ始めた。

E10-4 地点から E10-2 地点にかけては作下または黄土、岩を含む暗灰色下に巾 0.2m、高さ 0.3m ほどの搅乱溝が各所に現れた。これらは地下水の水穴と推察され、搅乱土の中には通水による沈積と思われる薄い砂層も見られた。

このような搅乱溝は E グリット、10m の間に 6ヶ所、計 7m 近くも点在した。

D トレンチに統いて、直交する B-E トレンチのこの様相から推察して本遺跡の層序の確定の難しさが予想された。

以上の作業中、D トレンチからは陶器片、B-E トレンチからは丸型石斧、縄文片各 1 点、他土師器片、須恵器片（平安期）数片の遺物採集があった。

B-E トレンチはこの後 B10-2 から D10-2 にかけて北側を 0.5m の堀り下げ作業を進めた。

この結果、D10-2 地点地表下 0.35~0.4m の暗褐色土に炭化物及び平安期の遺物数片を検出した。

以後、B-E トレンチに於て遺物検出の多かった D10-2、D10-4 地点を主として D グリットの拡張と、D トレンチ内の D10-1、D9-1・2 地点に検出された黒土（黒ぼく）の追究から調査を進めた。

以上の堀り下げ作業は、すべて人力で行ったが残る C・D・E 9 グリットのうち、D 9-2 を除く部分と、B・C・E グリットの 1・3 地点については重機により抜根、表土はぎを行うこととした。地形からも造構の可能性は薄く、一方猛暑による作業員の疲労も見え始めたことによる。

D 9-2 及び D10 グリットについては、B-E トレンチ、D トレンチのセクション面から慎重を期して手堀りで堀り下げを実施した。

C10 グリット 4 地点及び 2 地点には礫層が検出され、E10 グリット 2 地点には黒灰が多量に現れた。

D 9 グリット 2 地点から D10 グリット 1 地点にかけては巾 0.6m~1m、長さ 6.5m ほどの石組みが現れ E 9 グリット 3 地点においても長径 2m、短径 1m ほどの石組みが検出された。

重機による表土はぎの結果、D 8 グリット 2、同じく 3 地点には白色山粘土が現れ E 9 グリット 3

同じく 1 地点には黒灰の散乱が見られた。また E 9 グリット 2 地点より D 9 グリットを斜行し、C 8 グリットに至る 2.5m ほどの巾の黒色土（黒ばく）の表土が現れた。

こうして、ほぼ調査区全面の遺構をとらえ、各遺構毎に関連を確かめながら調査を進行した。

掘り上げ面の複雑な地層のため作業は遅れ、11月中旬までもの期間を費した。

この調査に作業員として、鈴木茂、鈴木精、小栗二三夫、杉山貞男、石川孝、鈴木やえ、杉山みさえ、山口桂子、杉田たかえ、鈴木かね、山口初代、内田猪平、松村正雄、石川けい子、高柳せき、小林よしえ、石川みよ、のみなさんには、農作業の間を縫って参加され、多大の御苦労をお掛けしたこと感謝する。

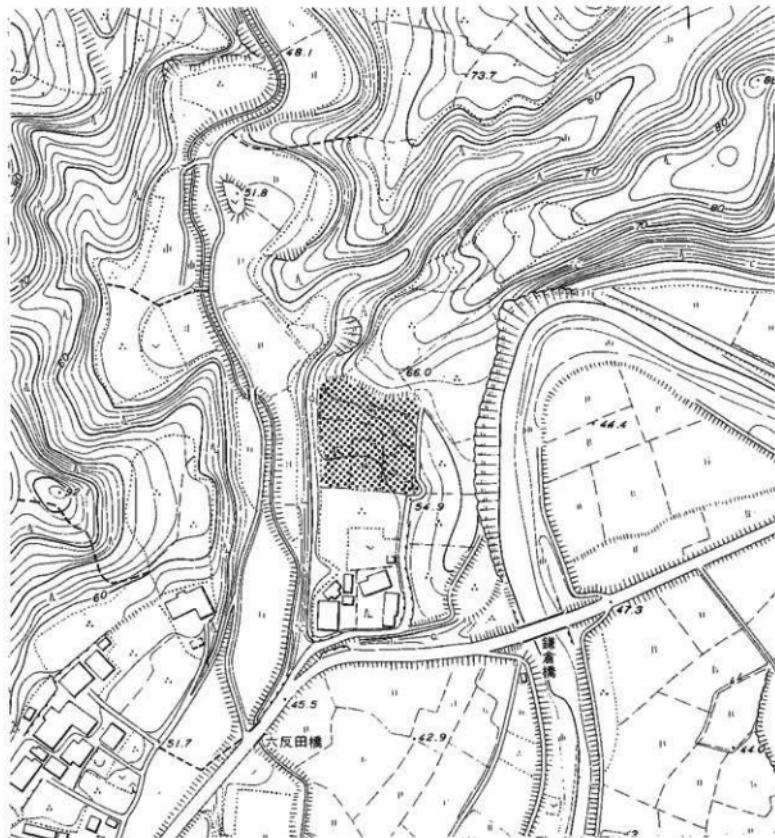


図1 遺跡周辺の地形図 (S=1: 2,500)

第2章 遺跡の環境と層序

六反田遺跡は、静岡県小笠郡菊川町友田825番地に所在し、小字名を六反田、所在地の通称を小庵平といい菊川右岸の河岸段丘上にある。

菊川河岸段丘は、元高校教師、大庭正八による5段階に分類されており、当遺跡はその中の第5段丘（本流沿岸）の上部より2段目の面に属する。

菊川町東北部に当り、地層としては、掘り之内層の東北端の部分に属し、隣接する神谷城礫層との接点の極近くにある完新世台地である。

富田山系の舌状台地の先端であり、東部は菊川の浸食により10数mの絶壁となり菊川の本流に落ち込む。西側もまた菊川支流の井谷沢川の浸食により数mの急傾斜となっている標高50～57mの台地にある。

菊川左岸の本遺跡に直面する段丘には、秋常段遺跡、また北東の下倉沢台地には、石棒の出土もあり現在河城小学校に保存されている。井谷沢川をへだてて隣接する西側段丘にも中世の5輪塔の出土須恵器片の出土もあった。

今回の調査では層序の確定が最も難かしく、表面作土（暗灰色土）を第1層と考えることとし、第2層は、黄褐色土、暗褐色土、赤褐色土、黒土と各箇所に於て土色は様々に変化はしたが粘土質の少ない部分を2層と理解した。遺物もすべてこの第2層及び第1層からのみ出土した。

第3層もまた黄色・白色・岩塊を含む赤黄色・暗灰色・青色と色の変化はあるが粘土質の多い層をもって第3層と理解せざるを得なかった。

更に深度を深めD10グリットの2地点における地表下2m附近に現れた青色粘土（砂・粗粒を含む神谷城砂岩混入）及びその下部の礫層をもって第4層とした。この層はE10グリット-3土壤底部にも見られこれより南西面に向けてゆるい傾斜で下っていることが確認された。

D11グリットよりD10グリット・C10グリット・B10グリットにかけての比較的平坦な面に於ては粘土質が緻密であり傾斜度の高い他のグリット面に於ては砂質がまじることから上記3グリット附近は、井谷沢川流域による堆積であり他のグリット部分には一部青色粘土内に神谷城礫層の細礫まじりの粗粒砂岩が混入することから菊川による堆積と現解した。

第3章 遺構の概要（挿図第2）

平窯（挿図第4）

D9グリット2の小岩塊を含む黄灰色土を切込み構策されていた。

長径2.5m、短径1.8mのいちじく型であり深さは煙道部に於て窯床面より0.85m、中央部に於ては0.8m窯口部では0.4mである。

プラン検出当初は、当地方で昔から使用した木炭窯の「四六窯」（4尺×6尺の窯）と酷似しており地形の勾配も設置条件に該当するので木炭窯としての認識で作業をすすめた。

天井部は剥落し床面全面に焼上がびっしりと詰まっていた。床面は窯口部より煙道部にかけてゆるい傾斜で上り、窯口部附近と、中央部近くの小さな凹部には黒灰が0.01～0.03mの厚さに積っていた。

煙道部入口には0.15～0.2mほどの大小の礫が12箇並べられいずれも赤く焼けていた。窯口部にも同じような礫が6個積まれ、他の焼土混合土によって塗り込められた礫4個とともに窯口を封鎖する形

になっていた。これらの礎の附近の焼土塊には径0.01~0.02mほどの竹または木の跡が0.03~0.05mの間隔をおいて残りの木または竹を立てたものに粘土を貼りつけて分炎柱としたものではないかと思われた。

煙道部入口の床面より0.4mほど上部を下端とし、0.1~0.15mの厚みの底状を炎返しらしきものがあった痕跡が壁面に残り床面に剥落した天井の焼土下からそれらしい焼土も見受けられた。

壁面は赤色焼土化し中央部においては、床面近くで約0.03m、天井部に近づくにつれて焼土化が進み0.6mあたりより天井部にかけては0.12~0.15mの厚みになっていた。

煙道部も上部は剥落のため残存しなかったが中央部で0.03~0.05mほどの厚みに赤色焼土化しその外部に茶褐色に焦げた土が0.08~0.1mほどの厚みになっていた。窯中央部に於てはこの茶褐色焼土は0.1~0.15mほどの厚みであった。窯内には遺物は皆無であり木炭窯に見られるタールの附着も壁面及び煙道部のどこにも見られなかった。

灰原らしき跡は、窯口から約3m離れ2.5m~3.5mの隋円状に黒灰が拡がっているほかは見当たらなかった。なおここからも窯に関連あると思われる遺物は発見できなかった。

以上により、当平窯は、木炭窯としての断定にはいたらず、また泉北丘陵古窯群に見る「窯状遺構」のような側壁の差木口の条件もなく土師質土器、または須恵器作成の補助窯としての根拠も薄い。今後、この種の窯の発見と調査に期待したい。

E 10グリットの土壤

E 10グリット3地点に大小の石塊の群が露出した。

開墾時凹地に集めた石捨場であり同時に投入された遺物数点も石塊の間から発見された。ここに投入されていた遺物は比較的大きな器形の破片が多く大形の瓶、壺等の破片、さざえの貝殻、江戸期の湯呑茶碗等が併出した。

石は100個以上に及び取除いたあとは長径3m、短径1.8m、深さ0.4~0.5mの土壤となった。

底部及び側面の底面より0.25mまでは落葉樹の葉がびっしりと堆積し石によって押さえられていた。

落葉層内からは鋭利な刃物によって切断された小木片、丸太が検出され黒くこげた灰搔き1点も検出された。

落葉層下部は鮮かな青色砂質粘土であり、神谷城層に見られる細礫まじるの粗粒砂岩が混入されていた。1部木炭も粘土層中に検出され前記灰搔きと併用して考えるとD 9グリットの窯と関連する土壤が開墾時石捨場として埋められたものと思われた。

D 10-2 石組み（挿図第5）

この遺構は、D 10グリット2の地点からD 9グリット1の地点にかけて検出された巾0.3~1m、長さ6mの構状遺構に大小の石が放り込まれたものである。

溝は窯前にまでつらなり窯に関連ある遺構かと思われたが黄土、及び擾乱された褐色土を掘り下げた溝へ石を入れ暗渠排水とされたものであり石下の部分には砂の流れ跡も見受けられた。石組内には陶器片、須恵器片、砥石等が混入していた。

E 10-4 黒灰散乱、黒色ピット

E 10-4 黒色土の流れ込みの上に黒灰の散乱がみられた。その黒灰散乱の端に巾0.6m、長さ1mほどの不規則な隋円のピットが検出された。

ピット内は焼土と焼石数個があり黒灰がつまっていた。また半焼した木片2片も検出された。

当方には、木炭窯の内、白炭焼きの製法があり完全燃焼した炭材を窯外に掻き出し黒灰を掛けて木炭化する製法がとられていた。この白炭製造の遺構と思われる。

E 8 グリット、1～3の黒灰

この地点の黒灰は極薄く散乱し、開墾当時の表面のたき火か或いは野焼きのものと思われた。

E 9 グリットより C 8 グリットの黒土帶

自然堆積の黒土であり遺物の包含はほとんどなく、丸石等の流入したと思われるものが上部においてわずかに検出された。

D 8 グリット 2～3 地点の白粘土

調査区最上部に露出した白色粘土であり、やや砂質を含んでいる。

前記平窯で土師または須恵の製造が行なわれたとすると近くにこの粘土があることは重要な条件となる。

町内の陶芸家、成毛氏にお願いして焼土試験をして頂いた結果1200度Cの火力にも充分耐え得る土であることが立証された。

C 10 グリットの礫群

C 10 グリット 2・3・4、かけて小礫の群が検出された。

大きなもので径0.15～0.2mほどの砂岩でありいずれも不規則に欠け質も悪く両手で力を入れれば割れるようなものばかりであった。

遺物の包含はなく、深い所で0.45mほどの厚さがあり下層は砂質を含む酸化土であり高師小僧状の酸化鉄を含んでいた。自然堆積の様相が強く特に遺構として認められるものではなかった。

第4章 遺 物（挿図第6～8）

採集した遺物は800点弱である。灰釉陶器片が85%をしめ他は陶器片、土師器・石器、木製品、窯内焼土等である。

灰釉陶器

山杯・山茶碗はほとんど三角高台のものであり完型品は小皿数点のみである。

山茶碗のうち1個は輪花碗であるが成型も雑でありまた半面は半焼成品とも思われるほど乳白色である。胎土は緻密だが0.5mm～1mmほどの小礫がわずかに混入している。

小皿3個には黒書が見られた。

胎土は殆どが石英またはチャートの0.1～1mmの細粒を含み砂質粘土かと思われるほど粗い感じがする。

焼成度は、相当高温で焼成されたと思われる硬質なものが多くなかに半焼成品や低温の焼成と思われる赤褐色のものも数個混じっている。

陶 器

すべて破片である。

黒天目茶碗片数片の他近世～近代のものと思われるものまで約30点が山杯等と併出された。

土師器

20数片が検出されたがいずれも細片であり質もろく器台1個を除いては器形の判別も困難なものばかりである。

石 器、石 片

丸型石斧1個、打製石斧1個、同破片、石鎌1個の他石片30点ほどが検出された。砥石らしきものも2片ほどあるが現代の鎌鎌と思われる。丸石数個もあるが用途は判明せず自然石との相違も判明し

ない。

黒曜石片は2点のみであった。

木製品

当地方に於ける木炭窯には必ず使用された灰撃きと全く同型であり柄取付部あたりの切込みの刃物の鋭利さから考えて近代のものと思われる。

ガラスレンズ

D10—2地表下0.4m附近の黒灰混合暗灰色土中から検出された。径20mm厚さ2.5mmの片凸レンズである。玩具の望遠鏡のレンズと考えられ併出した山杯土師器等も攪乱等によったものと理解した。

縄文土器片

縄文土器と見られるのは1片であり表面作土上で検出された。前記丸形石斧も同様であり他からの流入と考えられる。胎土は比較的粗く石英の微粉を含む。浅く沈線が3mmほどの中に刻まれ沈線から9mmほど離れて8mmほどのV字型の文様が見られるが摩耗のため判別し難い。

当遺跡を縄文遺跡として指定してあったことはおそらくこうした表採の結果であろうが誤りであることが立証できるのではなかろうか。

ま　　と　　め

縄文遺跡として指定されていた当遺跡も、調査の結果地表面に僅か数点の縄文遺物を発見するにとどまり遺構そのものについても特にとりたてて認め得る点は無い。

近代に於ても燃料としての薪炭の需用は多く、雜木林は4~50年毎に伐載されて薪炭用とされていた当地方としては山林中の各所に炭焼窯跡もありそれに附隨する灰原も見られる。木炭製法のひとつ白炭焼窯に於ては完全燃焼した炭材を窯外に撞き出し製炭するため窯内のタールの附着は殆ど見られないものもある。D9グリットの窯も或いはこの窯に類するものであったかも知れない。

牧之原開拓による茶樹栽培に倣い明治中期以降当地方では茶園の開墾が拡まった。ゆるい傾斜の台地、斜面等排水の良い原野・山地はさかんに開墾され現在に至っている。その時点に於て茶園造作のため原地形からは相当に整地される。

当遺跡もこうした開墾による土の移動・耕作の障害となる石塊・礫等の集結捨場等による遺構と思われるものが多く若干の遺物の検出は見たものの住居跡或いは集落跡としての遺構は認められなかつた。

3点検出された墨書き土器のうち1点に「寺」と判読できる物があることから伝説化した小庵(初庵?)の言い伝えに何等かの関連があるものかとも考えられた程度である。しかし、建造物跡らしきもの(柱穴・柱石等)も判明せずこの点についても詳かでない。

各所に散見した黒灰についてもこうした木炭製造或いは焼畑農耕的な開墾時に使用した火の跡とも考えられる。

灰軸陶器片の出土についても一定の層に限られず各層に包含されていたことから限られた生活層の断定はできない。平安期或いは中世に於ての生活面が台地全体のいずれかにあったことは認め得るが今回調査区域内には限定できるものは認められない。

資料

小庵平

。伝説ニ曰ク 凡五百年前妙照姫アリ、落合権頭ノ女ニシテ、京都ニ生ル、父、権頭ガ、遠州佐夜中山ノ土駿討伐ノ命ヲ蒙リ比国ニ下リシモ功就ラズ、破退シテ福田港ヲ指シテ落行キ、其後富田村ニ帰来シ土着ス、姫ハ家ニ有リテ越墻ノコト露ハレ流島船上トナリ幸ニシテ福田港ニ漂着シ父ノ此ノ地方ニ有ルヲ聞キ、即チ訪ネ來リケレバ父ハ其由ヲ聞キ友田西ノ原山中ニ小庵ヲ結ビ往ハシメタリ、現今存在セル妙照ノ墓ハ庵室ノ跡ナリト云ウ（河城村郷土誌）

。しょあん平 天和三歳亥十二月水帳田畠高辻

二十一石七斗一升 庄屋 次右エ門

。慶応三年田畠明細帳ニ曰ク

落合権頭ノ娘妙照姫ト称シ尼トナリ庵室ヲ友田段ニ結ビ（初庵平ノ字アル所以カ）後平六段ニ移リテ妙照庵ヲ作ル、墓所現存シテ妙照寺ノ開創ナルコト

（上記いずれも「河城村郷土誌」より）

お わ り に

猛暑の8月中旬から始めた調査であったが、調査員の不慣れさと、複雑な地層のため試行錯誤を重ね、天候には比較的恵まれたものの調査期間が長びいた。

このため、中部電力株式会社浜岡幹線用地グループの方々には多大の御迷惑をお掛けしたにもかかわらず寛大な処置により調査終了まで御協力頂けたことに感謝する。

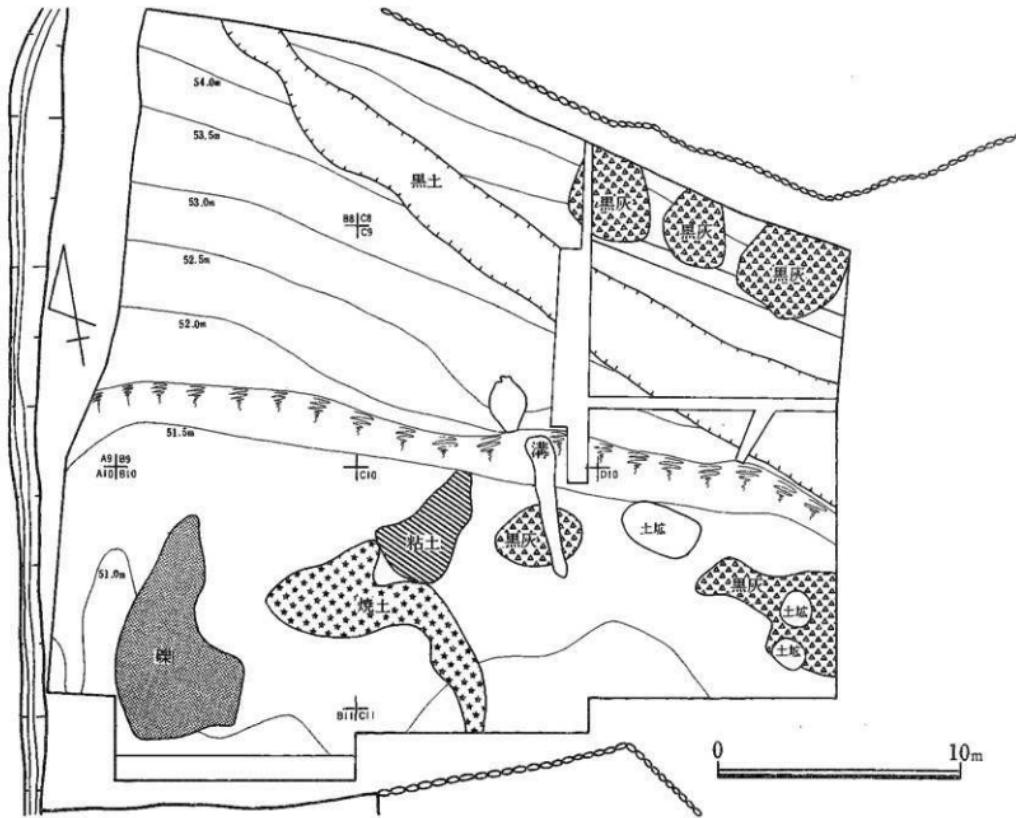
遺物・資料整理については河城地区センター高木俊雄氏の御協力によりセンター内の一室を提供して頂き整理作業も快適に進ませることができた。この間地区住民の方々には御不便を掛けたことと思うが快よく御協力頂けたことに御礼を申しあげたい。

なお、大庭正八氏、成毛進氏には専門家としての御指示、御教示を頂けたことに稿の終末ながら深く感謝する次第である。

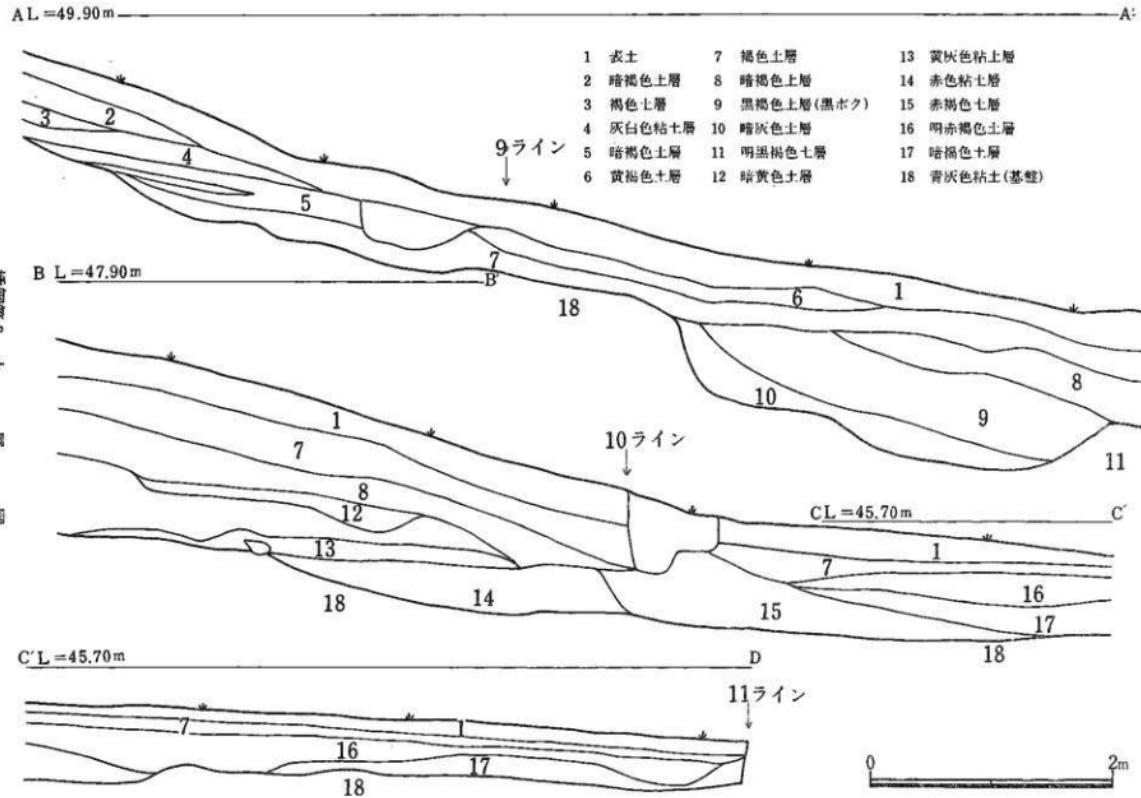
插表第1 遺物観察表

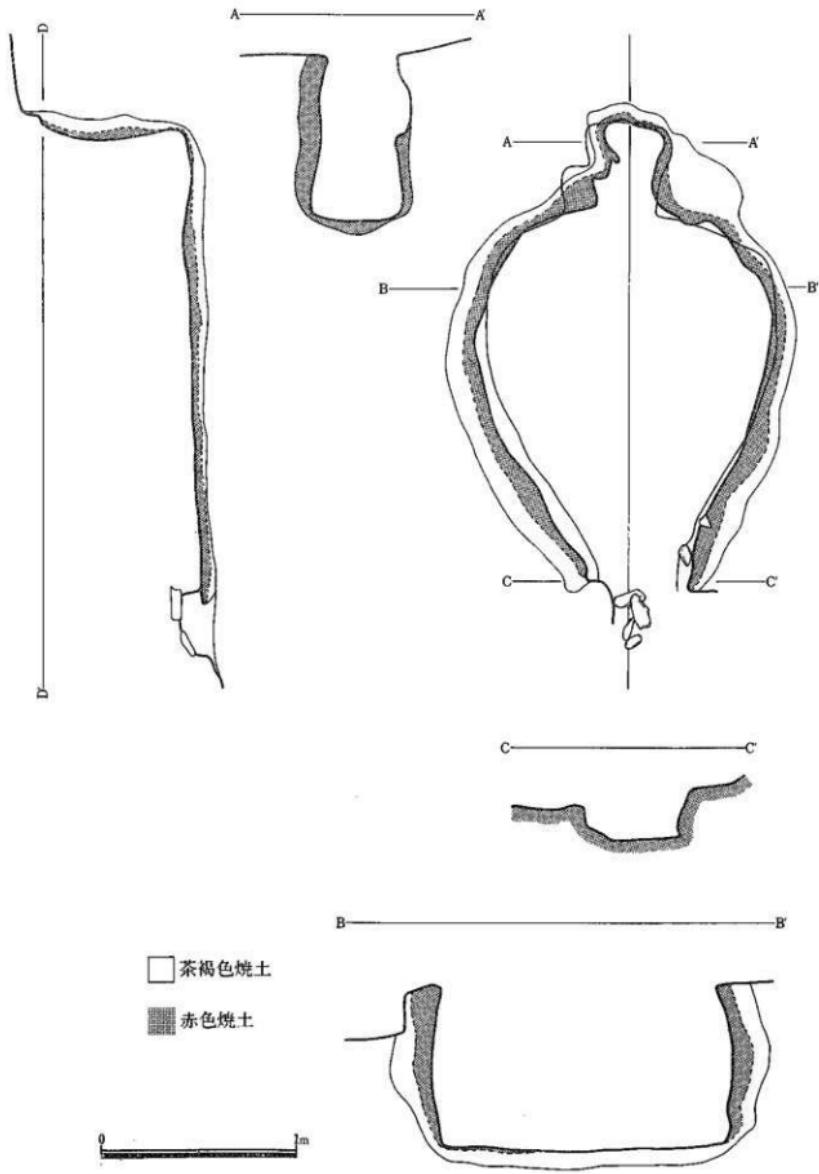
番号	器種名	地 区	色 調	口 径 (cm)	底 部 (cm)	器 高 (cm)	登録 番号	残存 率	備 考
1	山茶碗	D10-2	灰青色	17.0	7.2	5.2	578	1/1	
2	"	E10-3	灰青褐色	15.8	7.3	5.1	712	1/4	
3	"	D11-3	灰赤褐色	14.3	6.4	4.4	782	3/4	高台の作りは粗雑である。
4	"	D10-2	灰青色	16.5	6.8	5.9	582	1/2	
5	"	D10-1	灰白色	15.9	7.5	5.6	186	1/2	胎土、色調共に異質である(湖西?)
6	"	D10-2	灰青色	16.2	6.6	5.1	576	1/4	
7	"	"	"	16.7	6.9	5.7	584	1/2	
8	"	"	暗灰青色	15.8	6.2	5.0	583	3/4	
9	"	D10-1	灰青色	—	7.2	—	354	1/2	
10	墨書き土器	C10-2	"	—	4.4	—	775	1/1	「寺」
11	"	"	"	—	6.8	—	773	1/1	「寸」?
12	"	"	暗青灰色	—	4.5	—	774	1/1	「匂二寸?」
13	山 环	D10-1	明灰青色	9.0	4.3	2.6	183	2/3	
14	"	C9G-2	灰青色	9.3	4.9	2.6	767	3/4	
15	"	E10-4	"	9.5	4.4	2.4	741	1/2	内側、緑褐色の自然釉
16	"	D10-2	"	8.6	4.3	2.7	579	1/1	
17	"	D10-1	"	8.4	3.9	2.4	367	1/3	
18	"	D10-2	"	8.4	5.2	2.4	571	1/1	
19	"	D10-1	"	8.4	5.0	2.9	185	1/1	
20	"	D10-2	"	8.2	4.8	2.6	580	1/1	
21	"	D10-1	"	8.4	4.9	1.9	181	1/1	
22	小 盆	"	灰赤褐色	8.7	3.0	2.1	184	1/1	
23	"	"	灰青色	8.2	4.4	1.8	176	1/8	
24	"	"	灰白色	8.6	4.3	1.7	182	1/1	
25	"	"	灰青色	8.3	4.2	1.8	178	3/4	
26	高 环	D10-2	"	9.8	4.9	3.6	570	1/1	丁寧なヨコナテ調整
27	かわらけ	D10-3	黄褐色	8.2	4.0	1.6	642	1/2	焼が良くかたい。
28	壺	C10-3	白灰色	—	—	—	129	—	胸部に「上」の字をへて描く。
29	瓶	E10-3	暗灰褐色	18.8	—	—	673	1/8	
30	燭 鉢	C9G-2	赤茶褐色	30.9	—	—	763	—	
31	"	"	茶褐色	30.8	—	—	764	—	
32	石 鐵	D10-4	暗青緑褐色	長さ 3.9	幅 1.7	厚さ 0.5	638	1/1	石材チャート飛行機鐵
33	打製石斧	E10-3	暗青褐色	9.3	3.6	2.0	688	1/1	石材不明

插图第2 全体図

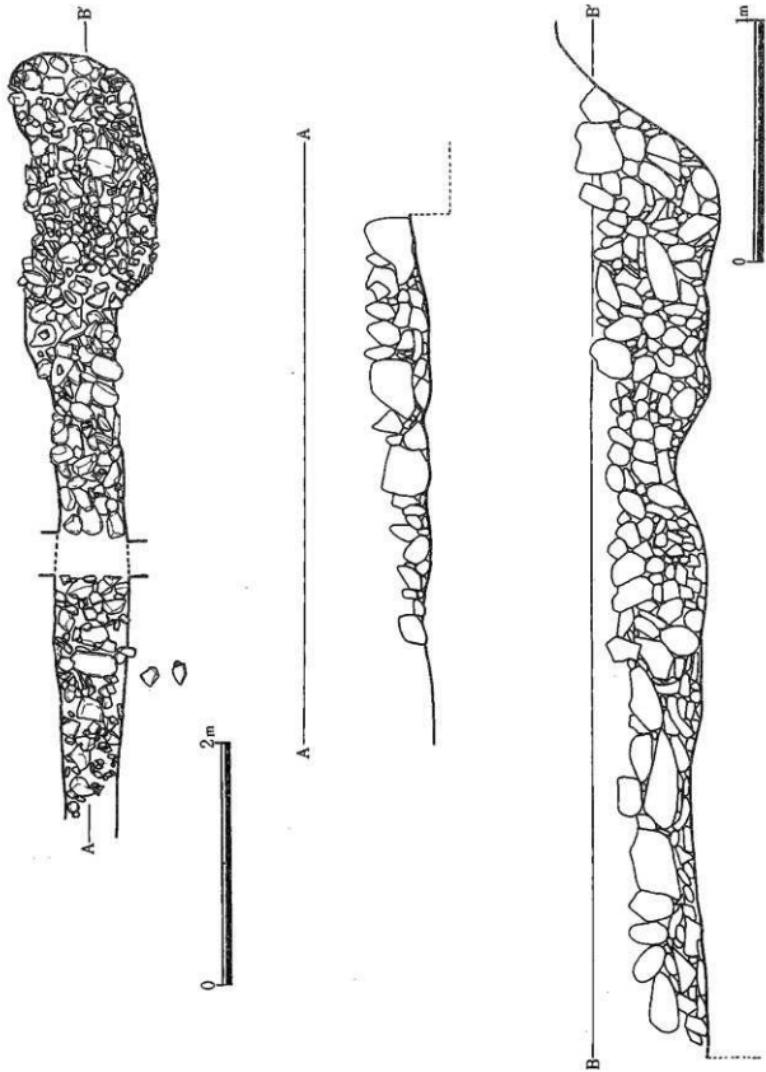


第三圖 土層図

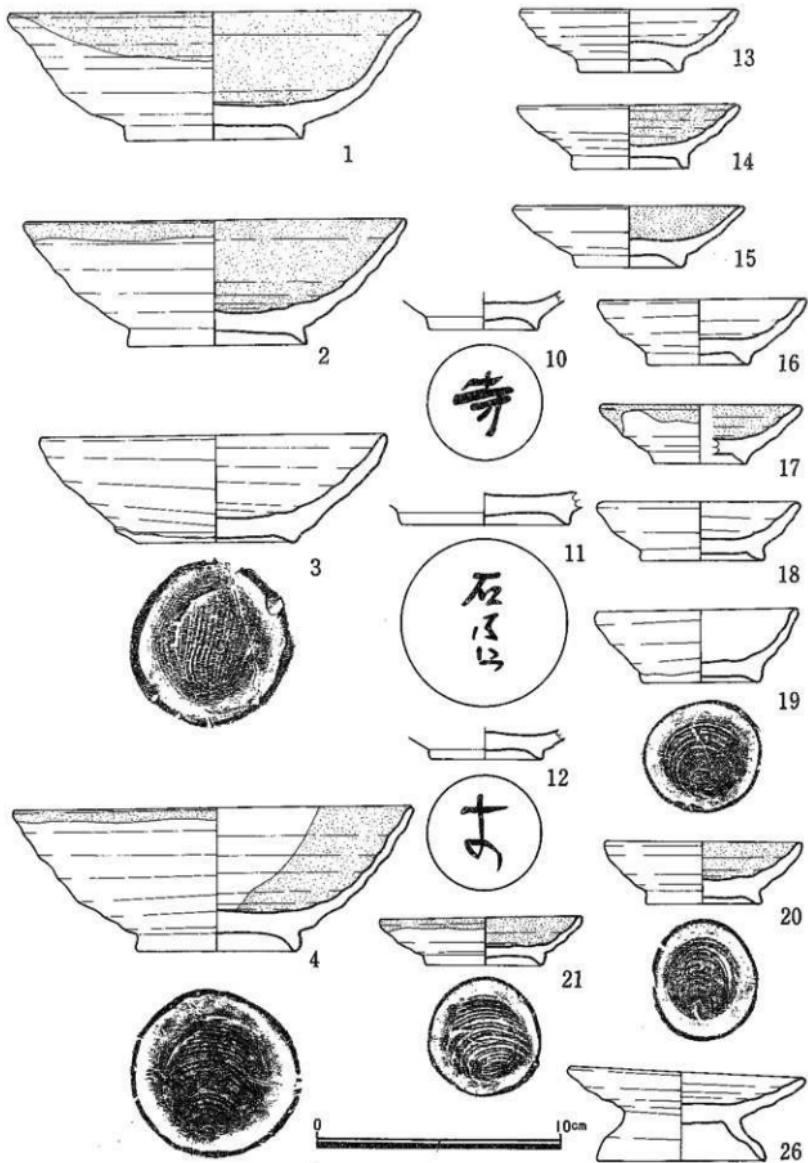




插図第4 窯跡実測図



擇図第5 集 石 溝



插図第6 遺物実測図 1

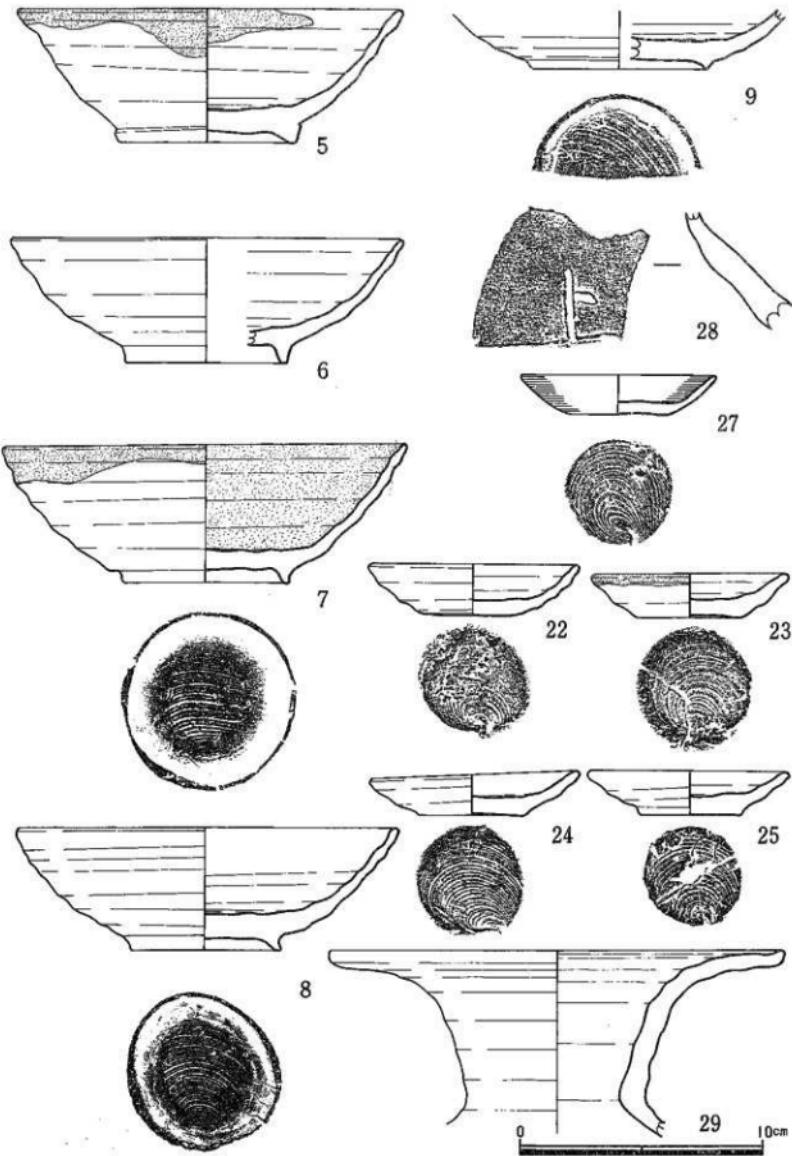
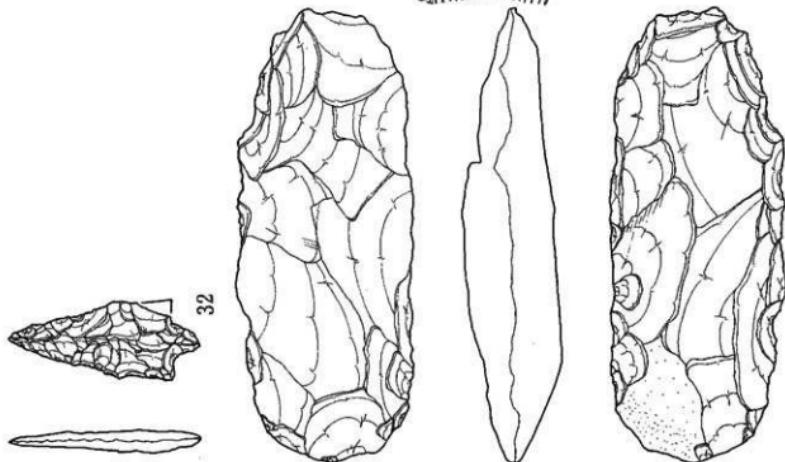
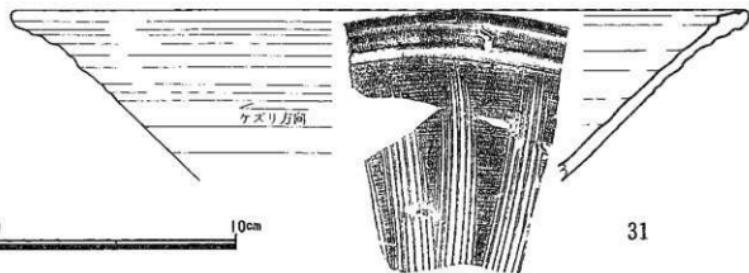


図7 造物実測図 2



插図第8 遺物実測図 3

六反田遺跡発掘調査報告書

1985年3月30日

編集 菊川町教育委員会

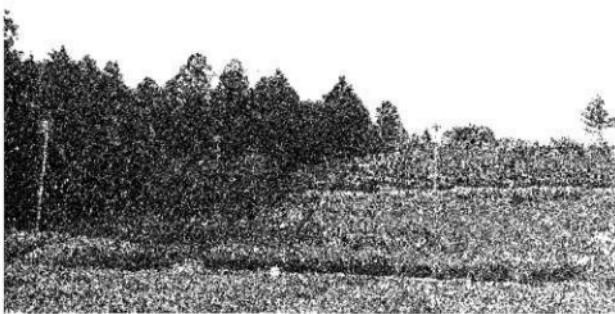
発行 菊川町教育委員会

印刷 株式会社開明堂

写真図版 1



A
遺跡遠景

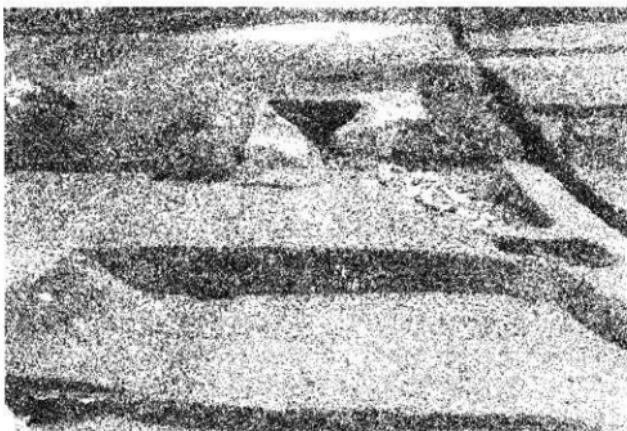


B
遺跡発掘前全景

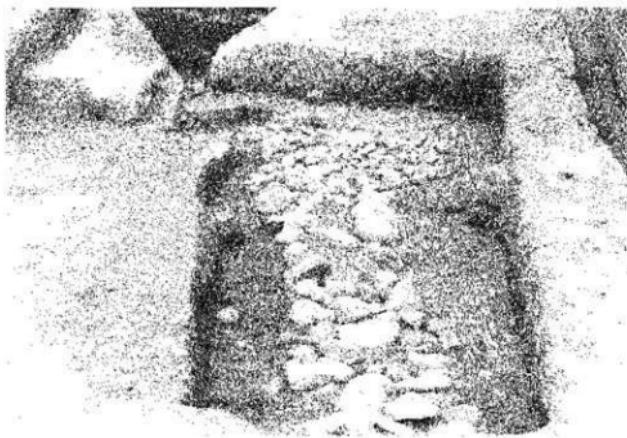


C
完掘状況

写真図版 2



A
C10グリット
集石溝と窓



B
C10-2 グリット
集石溝

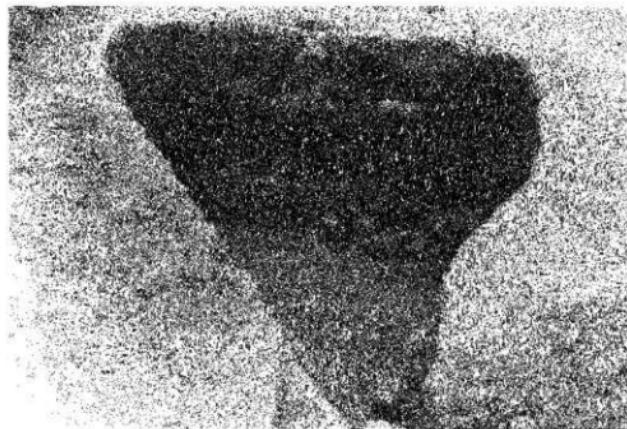


C
C10-1 グリット
石組

写真図版 3



A
窯口部

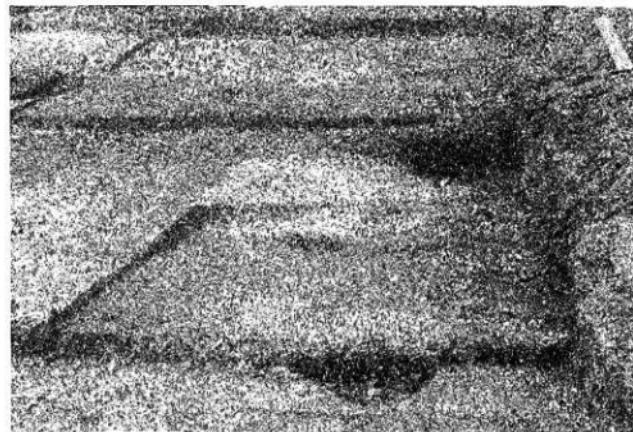


B
窯内部

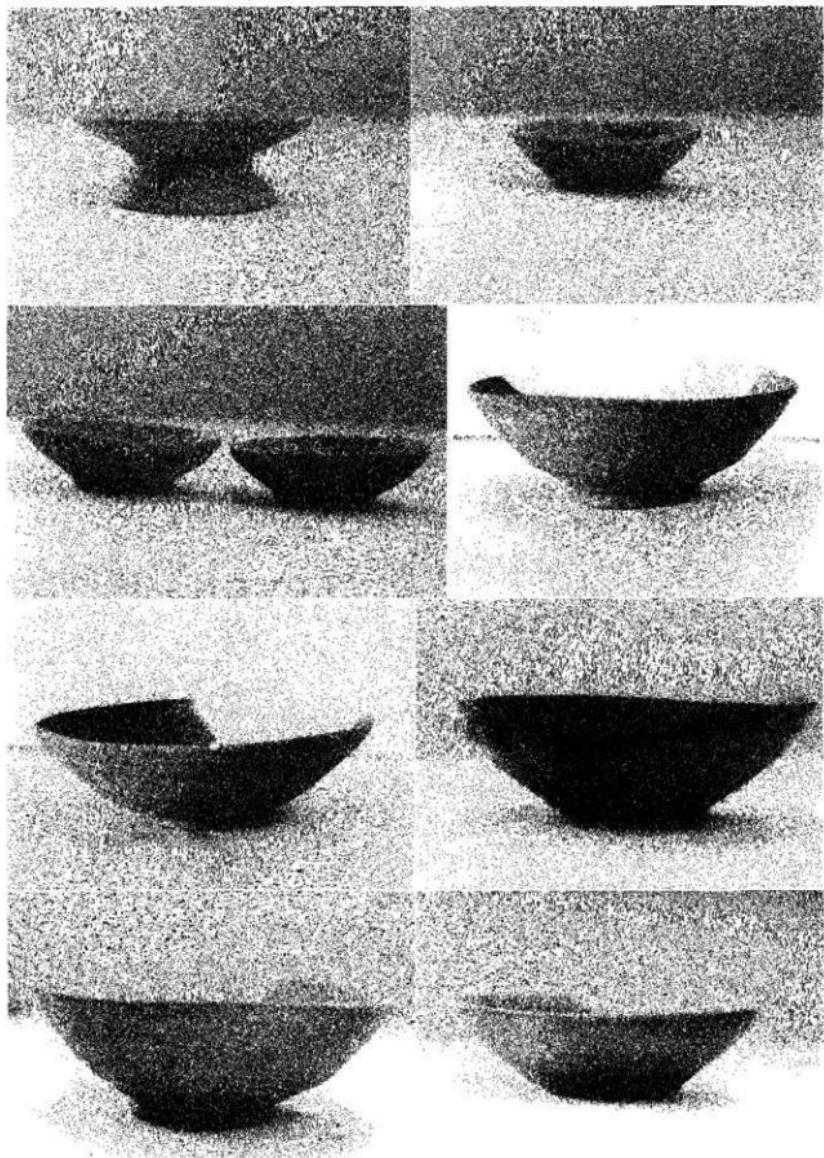


C
窯焼跡

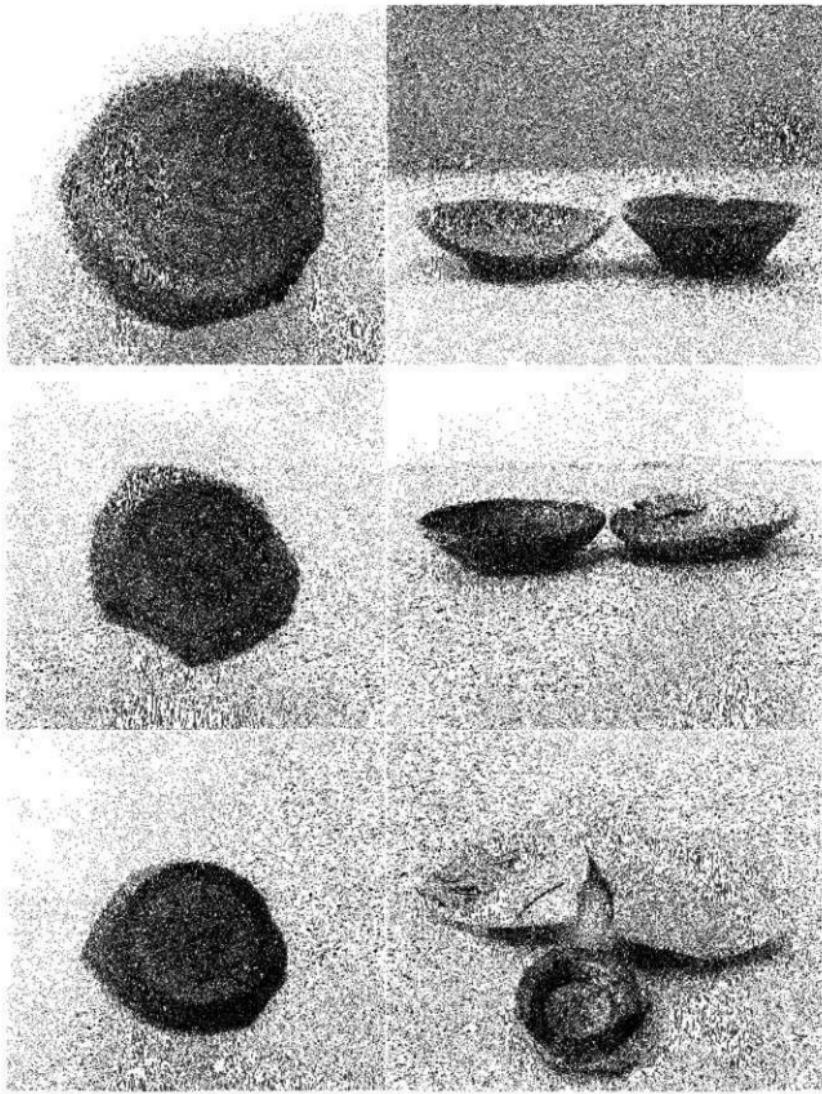
写真図版 4



写真図版5 遺物1



写真図版 6 遺物 2



写真図版 7 遺物 3

